

女の惑星

放射朗

1

『男は金玉だけあればいいのよ』

それがメアリーの残した最後の言葉だった。

女性の少ない宇宙船の中でさえも、男同士が愛し合う事にメアリーは嫌悪感を持っていた。なまじ身体があるからそんな汚いな事をするのよ。いっそのこと男は身体はなくなって睾丸だけの存在になればいいのかわ。彼女はそんな暴論をよく吐いていた。そして、彼女は行方不明になった。

宇宙船の前に横たわった強烈な磁気嵐。彼女はそれを調査しに行った。僕は司令室にいなかったから、これは伝聞だが、彼女は突然 SOS を送ってきたかと思うと、手品師が片手に持ったコインを何気なく消してしまうように、あっさりと宇宙空間から消えていなくなったそう。

そして彼女の捜索及び救出を命令されたのが、この僕だった。

ジャックの真つ黒くて太いペニスで、お尻を貫かれている最中に呼び出しがかかったから、僕はちよつと不機嫌で、いらつきながら司令室に向かった。

「タケルのお尻は最高だよ、アジア系が女としては一番だよな」
黒人のジャックは僕の中に入るのが大好きなのだ。三日に一度はベツドを共にしていた。

今だって非番でたっぷり彼と愛を交し合っているとこだったのに……。だが行方不明となつては仕方が無い。

彼女には確かにいろいろ傷つけられることもあつたけど、この際関係ない。とにかく彼女の命を救うことが今のところ最重要課題なのだ。人類の損失は少しでも少なくしなければいけないのだ。

たとえそれが同性愛を毛嫌いするガリガリの差別主義者の命であってもだ。

一人乗りの小型宇宙艇は一人の操縦士が座つて操縦する最小限のスペースしかない。周囲はメーターやらランプが壁いっぱいレイアウトされている。

いつも肘をぶつけて痛い思いをする突起に注意して、僕は操縦席に座つた。思うのだが、このシートは大柄な白人向けだ。僕みたいな小柄なアジア系には腰のすわりが悪く、きちんと座れない。サイドのサポートだけでも可動のものに交換してくれるように言っているのに一向に改善される気配もなかった。

周囲に浮かび上がるディスプレイの文字を確認した後、僕はメインキーをひとつ、そして補助スイッチを五つほどオンにした。

「KT1001準備完了しました。発進の許可を下さい」

マイクに向かって言うと、了解。しばらく待てと通信士のサムの声が返ってきた。

母船の前に横たわる磁気嵐は相変わらず激しく反応している。その様子が、この船のディスプレイにもはっきり現れていた。

5分ほど待たされて、いいかげん遅いと感じてきた頃に、やっと司令官の声が聞こえた。

「OK、KT101発進を許可する。タケル、君のモニターでも見えてると思うが、磁気嵐はまだ強烈に荒れ狂っている。なるべくサイドのほうから搜索してくれ。われわれも貴重な探査艇と、それ以上に大切な乗組員を失うのは勘弁して貰いたいからね」

「了解」

一言返事をするとは僕は逆噴射のジェットを吹かした。

エアロックが目の前ですばまるように閉じ、探査艇は母船から切り離される。

ゆっくり方向を変えると、メアリーの遭難した地点に向かって一気に加速した。

バックモニター越しに見える母船のひょうたんみたいなシルエットはあつという間に小さくなり、窓からの光をかすかに漏らす小さな点になった。

モニター上でメアリーが消失した地点を確認しながら、ゆっくりと接近する。探査艇の前面は偏向ガラスになっていて直接可視光線でも見えるのだが、星間ガスが渦巻くだけで、特に変わったこともない。

「KT101異常は無いか？ そろそろメアリーの消失した地点にさしかかるぞ」

母船の司令室から船長の声が電波に乗ってやってきた。

少し雑音交じりなのは磁気嵐が電波障害になってるからだろう。

「今のところ異常なし。磁気レベルも危険領域よりはだいぶ下まわっています」

別に返事をする必要も無いのだ。僕が得ている情報はすべて母船の

コンピューターがモニターしているのだから。それでも答えるのは、あえて言えば礼儀と言ったところだ。瞬間的にくんと船がゆれた。目の前の映像がぶれて、ヘルメットをかぶった頭が横の機械類にぶつかる。

何か岩にでもぶつかったような衝撃だった。

レーダーで常時監視しているから隕石に衝突する可能性は無い筈なのに。このあたりの時空がゆがんでいるからなのだろう。

光がいきなりやってきた。周囲は閃光でまばゆく、目を開けていられなくなる。

閃光の渦の中で、黒い点が小さく見え、それが急速に大きく膨らんだ。それに向かって吸い寄せられているのだ。

操縦桿で体勢を立て直そうとするがうまくいかない。逆噴射しても無駄だった。

メアリーもたぶんこの穴に飲み込まれたんだろう。

小刻みにゆすられる探査艇は嵐に遭遇した小船のようだった。

操縦席の周囲のパネルでは赤いランプがいくつも点灯して危機を知らせているが、僕にはどうする事もできない。嵐が静まるのを待たなければならないSOSはすでに出してある。

SOSボタンをワンプッシュするだけでいいのだから。でも、母船がこの信号を受信できたかどうかは怪しいものだ。黒い穴が見え始めてからは磁気嵐レベルもけた違いに大きくなり、モニター上に現れていた母船との交信マークはすぐに消えてしまったから。

強い重力に吸い込まれる。

まるでブラックホールに吸い込まれているみたいだった。

数分後、それまでの嵐は始まった時と同じように瞬間的におさまっ

た。

前面の偏向ガラスの前にはこれまでと違って変わって巨大な惑星が見えている。近くにそんな星は無かったはずだ。

でも、僕はその変化に驚くよりも宇宙飛行士としてするべきこと、船の機能の点検を先に済ませる。ランプはいくつかを残して緑に変わっている。破損箇所はメインエンジンの一部。他にはコンピューターの時計が狂っている以外は特におかしいところは無かった。

目の前の星は青い惑星だ。まるで地球にそっくりだ。それに向かってどんどん落ちていく。

メインジェットが動けば脱出できるが、補助エンジンだけでは軌道を離脱する事は不可能だ。なんとか体勢を立て直していると青い星の地面がみるみるうちに近づいてきた。

コースを変える事もできない。減速するのがやっとだった。

地表が近づいてくる。眼下は緑のジャングルだった。振動と轟音の中でジャングルに不時着する。木々を押し倒し、木の枝や土や岩を吹き飛ばしながら数キロもすべり、やっと水辺で探査艇は停止した。

沼地だった。大気との摩擦で熱せられた機体が周囲の泥水で冷やされる。湯気が立ち込めスクリーンが曇って何も見えなくなる。

探査艇は沼にずぶずぶと沈んでいく。

コンピューターでこの星の安全度をチェックする。

酸素濃度、重力、気圧に温度、危険な微生物など、調べている最中にもゆっくり船は沈んでいる。

早くしろ。早く！船が沈んでしまう。沈んでしまえば脱出できなくなる。

温度・OK、気圧・OK、モニター上でゆっくりと事が進んでる。

目の前の偏向ガラス面は半分が水中に没しようとしている。

僕は必要な備品を詰めたバッグを持ち、前面ガラスハッチの脱出ボタンに手をかけた。

微生物・OK。モニターが緑色に輝いた。その瞬間脱出ボタンを叩くように押し込む。

ガラスハッチが外れると同時にぬるい泥水が押し寄せてきた。手足が動かせない。

あつという間に船が水中に沈む。僕は操縦席を思い切り蹴った。

泥水の中はどっちが上かもわからない。目も開けられない状態だったが、両手が水面を叩く音で、何とか浮上できた事がわかった。

草の匂いが強烈にしていた。木の匂い。水の匂い。何かの動物の尿のような奇妙な匂いも……。必死で泳いで何とか岸にたどり着いた。

身体が重く感じるのは、重力のせいじゃなくて宇宙服に水が入り込んでるせいだ。重くて動きにくいその宇宙服を僕は脱ぎ捨てた。

空気が湿っぽいと思っていたら、大粒の雨が滝のように降ってきた。元々びしょぬれだったから特に慌てる事もなく、備品の入ったバッグを一つ抱えて、大きめの木の根元で雨宿りする。

バッグを開いて備品をチェックする。

とりあえずの食料がひと月分、これはカプセル型で一日に一個飲めば何とか生きていけるものだ。それに小型水筒タイプの飲料水製造機。万能治療機、通信機、護身用の電気鞭、ガスガンこれだけあれば母船が救助に来てくれるまで何とかなるだろう。

救助に来てくれればの話だが……。

実際僕の場所が母船の連中に捕らえきれぬかは、はなはだ疑問だ。空間的にワープしたみたいだし、空間をワープしたのなら時間的にも移動している可能性が高い。たぶん救助はこないと考えるほうが妥当だ。

一気に落ち込みそうになった時、離れた場所の草が動き、何かの気配がした。誰がいるのか？僕はガスガンを取り出すと、気配のしたほうに注意を向けた。

まだ雨は降り続けている。

雨に煙った状態でほんの十メートル先もよく見えない。

その草の陰から出てきたのは、筋骨たくましい人間だった。男だ。

石器時代の人間みたいに毛皮の衣類を簡単に身にまとっている。

その男は最初不思議な表情をしたが、すぐにゆっくり近づいてきた。

「止まれ。こっちにくるな」

ガスガンを振りかざし、僕は叫んだが彼には通じないらしい。

その男の後ろからも数人の男達が続いて出てきた。

地球人ではないといっても、人間型の知性を持っていそうな動物を殺すのには抵抗がある。しかし、逃げるにも逃げ切れぬし、仕方が無い。僕は威力を最弱にセットして先頭の男を狙った。

でも引き金を引くのは無理だった。

いつのまにか僕の後ろにも彼らの仲間が回りこんでいたのだろう。

頭に衝撃を受けて、ガスガンを落としてしまった。

頭を抱えてうづくまる僕を彼らは押さえ込み、不器用な手で衣服を脱がせにかかった。

何をしようというのだ？

血走った目の彼らのは明らかに興奮している。まるで雌を与えられて発情した雄の表情だ。シャツを脱がされ、裸にされた。

ベルトを解かれ、ズボンと下着一緒に剥ぎ取られる。あつという間に全裸に剥かれてしまった。

雨の中だ。

大粒の雫が身体を叩く。彼らはうめき声を上げるだけで、言葉をしゃべってはいないようだった。うめき声だけでは意味はわからない。

一人が革の衣類を脱ぎ捨て、僕の上に乗ってきた。

勃起したペニスは普通の人間のものだ。地球人と何の代わりも無かった。

僕の足を抱えるようにして彼が覆い被さってくる。

アヌスに先端が当たるのを感じると、すぐにいっぱいまで広げられた。アナルセックスには慣れているからその痛みは感じないが潤滑が悪くてきつかった。

彼が腰を動かすたびに僕の中で彼のものが激しく出入りを繰り返す。串刺しになるような感じの中で快感が少しだけ顔をのぞかせてきた。獣のような彼らの太いものに犯される時間はとても長く感じた。

ゆっくり楽しめるような状況じゃなかったからかもしれない。

四つん這いにされて、バックで犯され、お尻の奥に最後の男の熱い噴出を感じた。五人の男が一度つつ僕を抱いていた。そのあいだ誰もしゃべらない。

何か言葉をしゃべってくれれば、僕の脳の中の新脳が翻訳してくれるというのに。

彼らはまだ言葉ももたない原始的な段階なのだろうか。

最後の男が僕の中から出て行き、やっと僕は落ち着く事が出来た。彼らの目からも凶暴な光が消えている。

一人が立ち上がると、他の男達もそれに習った。

僕は座っているところを軽々と抱えられ、肩に担がれた。

ちよつと待って、バッグを。

僕の声には彼らはギョツとして立ち止まった。

いや、そうじゃなかった。遠くから響いてくる大きな足音、地響きも伴っている音で、何かの集団の接近を感じ取ったのだった。

急に彼らはパニックになった。僕は放り出されて、地面に転がる。

ちりじりになって逃げ惑う男たち。

自分のバッグと、衣服をかき集めながら成り行きを見守っていると、やぶの中からいきなり動物が飛び出してきた。

以前、船のコンピュータに記録されてる図鑑で見た『馬』によく似た動物だ。それに鞍をつけて、人が跨っていた。

重そうな鉄の鎧に身を包んでいる戦士だった。

僕はとっさに草陰に隠れる。

戦士たちは何事か叫びながら男たちを追いまわしている。

僕の新脳が忙しく反応する。だんだん意味がわかってきた。

「まわれ。その男を捕まえる。あつちに回つたぞ」

「あれは駄目だ。年寄りだ、殺せ」

「若いのだけ捕まえる、それ以外はいらぬい」

投げ縄のようなもので次々に男たちは捕らえられていく。

さつき僕を犯した5人の男たちはあつという間に捕まり、一箇所に集められていた。

馬から下りた戦士たちが数人、捕虜たちの前に歩み寄った。

捕虜をよく見るために戦士がフェイスガードを上げる。

その整った顔立ちは明らかに女の顔だった。よく見ると胸も膨らんでいるのがわかる。他の戦士たちも、全員女だった。狩るのは女で狩られるのは男だ。

リーダーらしい女が捕虜の中から3人選んだ。

そして残りの二人に向かって剣を振り上げる。

殺す気だ。

「止めろ」

僕はとっさにそう叫んでいた。ガスガンを構え、立ち上がる。

「おまえは……言葉がしゃべれるのか？ 男がしゃべるなんて初めてだ」

彼女は一瞬怪訝な表情を見せたが、その手はずばやく動いた。

ガスガンを発射する暇も無かった。実際戦闘訓練なんて受けたことが無いし、宇宙船の中では汗をかくのは愛し合う時くらいのもんだ。

彼女の投げた剣が回転しながら僕を襲った。胸に衝撃を受けたときはこれで終わりだと思った。死んだと。

檻に囲まれた馬車の中で、吐き気とともに目覚めた時、僕はまだ生きてることに気づいた。

切っ先が胸に刺さったのではなくて、逆側が当たっていたのだ。

この先に何が待っているのか想像もつかないが、やっぱり生きてるほうがましだ。

吐き気をこらえながら、僕はがたつく馬車の振動に身を任せていた。

馬車の中には僕を含めて若い男だけ八人乗せられている。
 みんな皮の腰巻一つで、日に焼けた肌はあちこちから血を流していた。狩られる時についた傷だろう。情け容赦ない乱暴な狩り方だったから。他の男たちはどうなったのだろうか。やはり殺されたのか？

この星はなんなのだろう。女戦士たちは明らかに男たちより文化的で強い。この地方だけのことなのか、それともこの星では男は野蛮で女に狩られる存在なのだろうか。

雨はすでに止んでいるが、日が暮れてきたから辺りはゆっくりと闇が濃くなりつつある。

大きな城門があり、それを抜けると周囲は石造りの建物の並ぶ都市に変わった。

中央に太い通りがあり、その両側には家が立ち並んでいる。

僕の眼から見て、中世のヨーロッパ的な町並みだった。

木造の家もあれば、石造りのものもある。それらの建物の窓から顔を出して大勢の女が覗き込んでいた。女ばかりだ。男は一人も見えなかった。

馬車の周りにも物見高い女たちが集まり、ついてくる。

大勢の子供も不思議そうに見上げていた。

石畳の道を50メートルくらい進むと広場になっていた。

そういえば僕の非常持ち出しバッグはどこだろうか。

馬車の上には無い。

見回してみると、バッグはリーダーの女戦士が首にかけていた。

何とかしてあれを取り戻さないと……。

思案していると、馬車の扉が開いて、広場に下ろされ整列させられ

た。男たちは皆身体を小刻みに震わせ、眼はきよきよしている。座り込んで動けなくなるものもいた。

彼らもここに連れてこられるのは初めてなのかもしれない。

「おまえ。こっちに来い」

リーダーの女が僕に向かって言った。

僕は黙ってその女に近づく。

彼女は僕よりも10センチ以上背が高く、体重も重そうだった。

肉弾戦でもとてもかかないそうに無い。

「他の男達は洗っていつも通りにしろ。この男は私が預かる」

「わかりました。アリア様」

リーダーに命令された女の返事で、彼女の名前がわかった。

ひときわ大きな建物の中の一室に、僕は連行された。

部屋は広々としていて天井も高かった。中央に大きな寝台が置いてあり、壁に沿って机や物入れ、棚などが並んでいる。

アリアは鎧を外し、ヘルメットをとった。

ヘルメットの中に巻き込んでいた長い髪が、揺れながら下りてきた。そのまま、何の躊躇もなく下着を脱ぎ捨てると、全裸になり、僕の方を向く。

僕に対してあまり警戒してはいないようだ。

体格の違いで、警戒するほどのこともないと判断したのか？

「言葉を話せる男は珍しい。おまえ、どこからきた？」

日に焼けた、たくましい身体のアリアは、ソファに腰掛け足組みして。彼女の胸も性器もあらわだ。僕は目をそらしたが、彼女は何も気にしていない。

羞恥心なんて皆無のようだった。

「遠くの星から来ました。事故が起こって不時着したんです」

彼女に意味が通じるかわからなかったが、事実を伝えるしかないと思っただ。

「この星の人間じゃないというのか……それならなぜ我々の言葉がわかるのだ」

彼女の疑問はもつともだ。一つの星の中で互いに理解不能な言語がたくさん存在する場合すらあるのに、別の星からきた人間が同じ言葉を使うなんて普通はありえない。

「僕の星の人間は脳の中に別の脳を組み込まれているんです。バイオ的に。その脳が計算や言語の翻訳などを担当してるんです。だから音声で意思を伝える言葉をもった生物なら異星人ともだいたい話が出るんです」

僕の意思は的確に彼女の使う言葉となって口から出て行く。鼻にかかった発音はどこか古代フランス語を思わせた。

アリアは立ち上がると僕の方に歩み寄ってきた。

いきなり強い力で僕の衣服が引き裂かれた。簡単には避けない新素材の制服も、アリアの馬鹿力の前では紙のようなものだった。

そして全裸にされた。

僕の身体をじっくりと観察してアリアは言った。

「普通の男と全然違わない。随分ひ弱だが……。おまえの言ってる事は信用できない」

「宇宙船を見れば信じれるでしょう。沼に沈んでます」

別に信用されなくてもかまわないが、言い出したのは自分だし……

……

アリアは口をへの字にして考え込み、そして言った。

「明日行ってみよう。今日は別の事をする。来い」

僕は別室に引つ張つていかれた。浴室のようだ。

シャワーからは暖かく心地よいお湯が噴き出してきた。

給湯設備なんて無いと思つていたのに、どこに隠してるのだろう。

男達よりは文化的だが、大した事は無いと思つていたのに、少し認識を変えないといけないかもしれない。

アリアはシャワーのしぶきの中で、僕の後ろに立ち身体を密着させてきた。女とはいえ筋肉質な彼女の身体は、宇宙船の中で抱き合っていた男を思い出す。

彼女のごつい手が後ろから僕の股間に伸びる。

逃げようとしたが強い力で腰を抱かれて逃げ切れなかった。

石鹸の泡をたっぷりつけて、アリアは僕のペニスを握ってきた。

そしてそれをゆっくりしごき始める。

「う……止めてください」身体をよじつても手は離れない。

「ここの反応も普通の男と同じだ。SEXも普通に出てくるか確かめる」

アリアから与えられる刺激は以外にも心地よかった。

優しくする術も心得てるようだ。何のために？

緊張の連続で疲弊していた僕の精神も少しずつ解きほぐされる。

元気になった僕のペニスをアリアは満足そうに擦り上げた。

いったんシャワーで泡を洗い流した後、アリアはひざまずきペニスに口を寄せた。

亀頭に舌を絡めるようにしてくわえ込んできた。

ん、ん……興奮したアリアのくぐもった声がもれてくる。

あたかも動物を狩るように男を狩りながら、その獲物の前にひざまずき、興奮しているアリアの痴態は、まるで性の倒錯者のそれだ。

巧みな口技は時間をかけて二人の気分を高めていく。

もつすぐ発射しそうだ。いきそう。と思った時、それを察知したのかアリアは離れた。

軽々と肩に僕を担ぎ上げ、彼女は浴室を出て寝台へ向かった。三人くらいは楽に寝れる寝台に僕は投げ出された。

仰向けにされて、両手と両足を広げた形で鎖に縛られた。

逃げるチャンスはもう無くなった。

シャワーの中、彼女がひざまずいている時が唯一のチャンスだったの……

「縛る事は無いでしょう。僕はあなたにはかなわないんだから」

アリアに聞く耳があるとは思わないが、言うだけ言ってみた。

「男といえども死に物狂いになれば女並みに力を出すことがある」
無表情にそう言って、アリアは僕の胸を舐めてきた。

どうしてそんなことをするんだろ。

彼女たちにとって男とはなんなのだろうか。

やはり子供を産むためには男が必要なんだろうか。

そして妊娠するためにはセックスが必要で、そのためには男の気分を高める必要がある。そのためだけの愛撫なのだろうか。

「あなた達の星の事をもっと知りたいです。女と男はどういう関係なんですか？」

アリアは硬くなった僕の物をつかむと、僕の腰の上に跨った。

自分の入り口に押し当て、そのまま腰を落としてきた。

充分に濡れたその褌の中に僕の物はぬるりと全部入っていった。

「話をしたほうが長持ちするかもしれないな。女と男の関係か、おまえが知りたいのは」

腰をゆっくりと回すように動かしながら、アリアは話し出した。

この星の男女は大昔は共同で生活していたらしい。

それがある時点で女が強くなり、男は知能が低下していった。

言葉もしゃべれない男は、女達にとって単に妊娠するための道具としての存在になっていった。

そのうち男女は別々に生活するようになり、男は野蛮な石器人、女は文明人と完全に分かれるようになった。今では、ひと月に何度か男を捕まえてセックスし、それで女は妊娠して子供を産むシステムが出来上がっている。

でも、子供の中には男の子もいるだろう。僕のそんな質問にも彼女はすぐに答えた。

男も生まれるのは当然だ。五歳までは男も女もここで育てる。しかし5歳になってとき男は城壁の外に追放される。その後は野蛮な男達の集団がその子供を育てる事になる。

最初はめちゃくちゃだと思っていたこの星の男女関係だが、話を聞いていくうちに、案外きちんとしたシステムのようには思えてきた。

要するに女が肉体的にも男以上に強く、その上男の知能が低いこの星ならではの男女関係といえるかもしれない。

話を聞いていくうちに僕は三回もいかされてしまった。

アリアはその度にいったん起き上がり、僕の性感帯を丁寧に刺激した。

飽きることなく何度でも彼女は僕を立たせようとする。

いつになったら休ませてもらえるのかわからない。一滴残らず死ぬまで搾り取られるような気がしてきた。

彼女の指が僕の肛門から入ってきて、ちょうどペニスの裏側あたりを刺激して来た。前立腺のマッサージだ。同性愛も慣れっこになって

僕には珍しくない刺激だが、それでも奮い立たせるには充分だ。再

び彼女が僕の上に跨ってくる。
何度も何度も同じことを強制される。

「もう許してください。痛くて立ちません」

6 回目の射精の後、彼女が腰を浮かした時に、すかさず僕は懇願した。縛られていて上体を起こせないのを見えないが、多分僕のペニスは赤黒く晴れ上がっていることだろう。

「ふん。本当なら男がギブアップした時は男が死ぬ時なんだぞ。まあいい。見せてやろう」

彼女はベッドの上に立ち上がると、仰向けに縛られた僕の上を歩いて、僕の顔のまたいで立った。

「ほら。口を開ける。全部飲み」

アリアはちょうど僕の口の上に股がくるように立っている。

口を開くと、赤黒い彼女の股間の襞のあいだからぬるりと僕の発射した精液が垂れてきた。口の周りにばたばた落ちてくる。半分くらいは口に入った。

びつくりするくらいの量だった。

同性愛に慣れた僕は精液を飲むのも初めてじゃないし、嫌悪感は薄い。元々は自分の出した物だし、毒にはならないはずだ。

彼女は僕が言われたとおりにするのを見て満足そうにならずいた。

3

僕は皮でできた首輪をつけられた。首輪には鎖がつながっている。そして両足を膝を曲げた形で縛られた。

こうなると立ち上がる事もできない。よつんばいに歩くしかなかつ

た。

「ほら。いい物を見せてやる。おまえの知りたかった事だ。この星の男女関係というやつだ」

アリアはそう言って鎖を引いた。

彼女に引つ張られて、僕は四つんばいで部屋を出た。石でできた建物だ。

膝が痛くて早くは進めない。いいかげん痺れを切らしたアリアは僕を片手で抱き上げ、肩に乗せた。

階段を下りて、少し行ったところでドアを開けた。

そこはテラスになっていて、五メートルくらい下に大広間が広がっていた。いくつも寝台が置いてある。

そして、その寝台にはさつき一緒に捕まった男達が一人づつ寝かされ、縛り上げられていた。

一人の男に五人から八人の女達が群がっていた。

何をしているのかは一目瞭然だ。

男達は全裸にされて仰向けに寝かされている。

裸の女が男の腰に乗り、結合部分を擦り合わせるように動き喘いでいる。そこにいる五人の男達は皆疲れ果てているようだ。

すでに何度もやった後なんだろう。

顔に跨られている男もいた。腰の上に跨った女と、顔の上に跨った女は悲惨な被害者の上で唇を重ねあっていた。

おうおう、あああ、などと男達はうめきながら泣いていた。

男達にとっては最初は快感なんだろうけど、もうとっくにその時間は過去になっている。見ているのも痛々しい。

ちょうど発射したあとなのだろうが、男の腰の上で動いていた一人

の女が立ち上がった。その男のペニスは赤黒く血がにじんでるようだった。

「男達はここで最後の一滴まで搾り取られる。十回から十五回くらい。そして、何をしてもそれ以上できなくなったときがその男の最後だ」

アリアは当たり前の事を言うように淡々とした表情でそう言った。

最後と言う事は、殺すと言う事だろうか。

「ちょうど、あいつが終わったようだ」

アリアの指差す方向には、さっき僕のお尻を最初に貫いた男がぐったりとしていた。その男の側に立った女が小型の剣を取り出した。

その剣は男の股間に向けられていた。

剣はペニスの付け根を押さえている。そのままスライドさせれば彼のは体から切り離されるのだ。男は恐怖の表情で悲鳴を上げた。

僕は声も出せずにその光景を見守った。なんと言うことか……。

男は人間とは認められていないのだろうか……。

血しぶきが飛ぶ事を想像したが、その代わりに一人の女の声が広間に響いた。

「止めてください。男だって、私たちから生まれてきた同じ人間です。殺さないでください」

ゆったりした白い衣を羽織った一人の女が広間の入り口から入り、剣を持った女の方へ走り寄ってきた。

その女は、女と言うよりまだ幼さの残る少女だった。

長い黒髪と白い肌。この星で見た他の女達と違って、身体は華奢でスマートだ。

日に焼けた筋肉質の女達の中で、全く別の人種かと思うくらいにその違いは際立って見えた。

「邪魔をするな。こいつらは生かしておいても何の役にも立たない屑だ。せめて我々の食料になれば、こいつらも本望さ」

剣を振りかざした女の言葉は、この光景以上に衝撃的だった。

彼女らは男達を性の奴隷とするだけじゃなく、一回使ったら使用済み男は殺して食料にしてしまつらしいのだ。

吐き気がこみ上げてきて気分が悪くなった。

この星は狂っている。共食いするなんて人間のやることでない。

カマキリ。そうだ。カマキリだ。

カマキリは交尾の後、雄が雌の食料となり雌の栄養になって産卵を助ける。でもカマキリの場合は冬になれば雄も雌も皆死んでしまふからなのだ。

冬を越せるのは自分達の産んだ卵だけだ。冬を越せずに死ぬとわかつてるから雄は雌の食料となるのだ。いや、そういうシステムがDNAに組み込まれているのだ。この星の男女のあり方とは全く本質的に違つのだ。

抗議していた可憐な少女は別の女戦士の手で引き離された。

そして抗議も空しく予定通りのことが、予定通りに行われた。

とても見ていられなかった。

最初に連れてこられたアリアの部屋で、僕はまだ四つんばいで床上に這わされてい

た。アリアは衣装を着けてソファにすわり、足を組んでいる。

アリアの前には、先ほど下の広間で抗議をしていた少女が立っていた。

少女は僕をちらりと見て、アリアの方に向き直った。

それまで感じていなかった羞恥心が湧き上がってきた。

全裸で四つんばいなのだ。それを可憐な少女に見られているのだ。自分の格好がものすごく情けなく思えてきた。

「センリの言い分は聞き飽きた。なんと言われようが、今のやり方を変えるつもりは無いぞ。神の指導のもとに始まった事だ。おまえも神官の一族ならわきまえてるはずじゃないのか」

アリアが言った。少女の名前はセンリというらしい。

「神の指導が本当に正しいのか、私には疑問です。男も女も女の体から生まれてくるんです。元々同じ種族なんです。それなのに生活圏を分けてしまうのは不合理です」

年上で、この種族のリーダーでもあるアリアに対して臆することなく果敢にセンリは反論していた。

「神の指導に疑問をもつなんて、聞き捨てならないな。もしおまえが女ならすぐに処刑になるところだぞ」

「なんだって？ センリはどう見ても女だ。少なくとも男ではないはずだ。それとも？」

「いまから千年前に神が降臨するまでは、おまえの言うように男女は共同で生活していた。しかしそれは間違った形だったのだ。神の指導で我々は今のような生活形態に変わった。男が墮落したからだ。墮落した男は言葉もしゃべれず知能も五歳から発達する事も無くなった。役に立たない男達と共同生活しても女が寄生されるだけなのだ」

アリアは優しく諭すように言う。センリはアリアがそうせざるを得ない立場の人間という事か？ 神官とか言っていたが。

「男が墮落した理由を調査するべきです。そして男をしゃべる事がで

きるようにすれば、以前のように共同で生活できるようになるはず……」

センリの言葉はアリアの言葉で中断された。

「男を復活させてなんになる？ 我々は女だけでうまくやっていけるじゃないか。男は争いごとの種になるだけだ。以前そうだったように戦争に明け暮れる社会を復活させたいのか。しゃべる男か……。ふん。その男、今日捕まえてきたのだが、こいつは突然変異かもしれない。おまえ達のように……。明日用事があるからまだ殺さないでいたのだが、明日までこいつを貸してやる。男と話合ってみるがい。何か発見があるかもしれないぞ」

アリアの言葉で、センリが僕を見た。

僕は自分の格好が恥ずかしくてうつむく。

金属音がしたので見ると、僕の首輪についた鎖を、センリはアリアから受け取っていた。

4

「とりあえず足を解いてくれないかな。膝が痛くてたまらないんだ」

センリの部屋に連れて行かれた僕は、真っ先にそう頼んでみた。

ここにくるまで僕は犬のように、彼女に引かれてきた。

女戦士たちにそうされるのは違って屈辱感で一杯になった。

僕の言葉に彼女はうるたえていた。

しゃべる男が初めてだからか、足を解く事を躊躇しているからか、どっちなのかわからない。でも、僕の足を解くのをためらっているのは事実のようだ。

「君も所詮あの女戦士たちと同じってことかい？ 男を信用できない

いのなら」

その言葉でやっと彼女は返事をした。

「信用できるとかできないとかの問題ではないわ。男は野生動物だから。野生動物をどう信用するの」

センリはやはり怯えていた。

アリアがセンリに僕を預けた理由が少しわかってきた。

センリの事を口だけの男女平等主義者だと考えたわけだ。

本物の男と接触すれば自分の考えがどれほど甘いものか理解するだろうと考えたのだ。

「僕が野生動物じゃないのはわかるだろう。他の男と違ってしゃべる事ができる。それでも、君は不安なのか」

「怖いわ。襲ってこられたら私はどうする事もできないもの」

「僕は乱暴はしないよ。話し合えるじゃないか。言葉で意思疎通できるものは乱暴したりしないよ」

優しく言っただけ聞かせているうちにようやくセンリは決心した。

僕の足を縛っていた縄を、彼女はナイフで切った。

しびれた足ではしばらく立つ事もできなかった。

僕は座り込んで足を揉みながら彼女を見た。

「君は本物の女性でないってアリアは言っていたね。どういうこと？僕の質問に彼女は眉を寄せた。

「それは不躑な質問だね。今回だけ聞かなかった事にします」

彼女は不快感を振り払うために、首を振りながら立ち上がると、部屋の隅に向かった。

「お茶を飲みますか」

ティーポットからカップに茶色い液体を注ぎながら聞いてきた。

「ちょうど喉が渴いていたんだ。ありがたい」

この星の環境は地球と同じようだ。その人間の飲み物が毒になることはないだろうと思う。非常持ち出しバッグが取り戻せない以上、毒検知器も使えない。

いつまでも飲まず食わずではられないのだから、もしも毒だったら諦めるだけだ。

彼女の入れてくれたお茶は、少しかび臭い紅茶の味がした。

暖かいお茶は僕の喉の渴きを癒し、優しく精神を解きほぐしてくれる。

「アリアには言ったけど、僕は遠い星からやってきたんだ。この星の人間ではないんだよ」

床に座ったまま僕は、部屋の反対側まで離れて椅子に座ってるセンリに言った。

「信じてはもらえないと思うけどね」

何も言わないセンリに、僕はそう付け加えた。

「あなたがどうかは知りませんが、伝説では神も宇宙から落ちてきたという事でした。何かの船に乗って」

さっきアリアが語った神の降臨話だ。でもアリアの言ったのよりも具体的だ。

「何かの船？ その船を見たものがあるのか？」

ひょっとしたら……と、僕の中で何かが浮かび上がってくる。

「船を見たものはいませんが、記録にはそのような図が記されているのです。なにか、丸い球体が開いて神が下りる所が書かれてあります」

「その記録を見てみたい。見せてもらえないだろうか」

僕の要望は多分不躑で無遠慮なものだろう。期待しないで言っただけだ。

「記録は神官しか見ることはできません。戦士のリーダーのアリア様ですら見れないんです」

別に怒ることなく彼女は言った。

「アリアか。ところで、僕のバッグを彼女が持つてるんだ。あれがあれば、僕の言ってる事が本当だって証明できるんだけど……」

センリに言っても無駄だろう。それはわかっているが、どうにかしないとこのままでは僕は殺されるのを待つだけだ。

「できれば私もその証拠とやらを見せてもらいたいものです。明日何か用事があるといっていました、それも関係するのですか」

そうだった。明日は船の墜落した沼地にアリアを案内しないといけないのだ。

でも、アリアはそれを見てどうするだろう。

僕が宇宙から来たことが証明されたとして、彼女はどうか考えるか？

僕も神の一族だと考えてくれれば、助かる余地もある。

でも彼女にとって神はイコール女であるはずだ。多分。

懸命に明日のことを考えていたら、不意に離れた場所で爆発音が聞こえた。

そして何か飛んでくる風きり音が……。

窓を破って火の玉が飛び込んできた。

あつという間に部屋の中は炎の渦に飲み込まれる。

センリの悲鳴。彼女は窓際に座っていた。僕は出入り口側だった。

火の渦でセンリは部屋に閉じ込められる。

机が燃え上がり、火の粉を放つ。カーテンに火が移る。僕は側にあったテーブルをひっくり返し、その上を渡ってセンリの側に行った。

センリの衣に火が移り、燃えようとしていた。

炎に眼をみはる彼女立ちすくんだまま、その火をはらおうともしない。

僕は彼女の衣を力づくで剥ぎ取った。そして投げ捨てる。

彼女は衣の下には何も着ていなかった。

細い彼女のシルエツトがオレンジ色の炎の光に浮かび上がる。胸は少しだけふくらんでいた。

そして股間には僕と同じ物をぶら下げている。

5

まだ燃えていないカーテン。それを何枚か引き剥がして、寄り合わせる。

「何をやるの？」

呆然としていたセンリがやっと気を取り直して聞いてきた。

「窓から脱出するしかないだろ。早くしないと二人とも焼肉になっちゃう」

「ここは三階よ。落ちたら死ぬわ」

「でもこのままじゃどつち道助からない。他に方法はないだろ」

何とかロープを作った。

これをどこかに引っ掛けて、後はそれにつかまって下りるだけだ。

「ほら、何とか大丈夫だ。君からいけよ」

センリの手を引っ張るが、彼女は抵抗した。

「嫌よ。怖い。私は降りれない」

炎はさらに広がっている。熱気で髪の毛も燃え上がりそう。早くしないとカーテンのロープまで燃えてしまつた。

僕はセンリに軽く当身を食らわせると、気絶した彼女を肩に抱えて

窓を乗り越えた。

セリは華奢で軽かったが、それでもひ弱な僕なんかそんなことができたのは火事場の馬鹿力というやつだ。

三階といっても各階の天井が高いこの建物の三階はかなりの高さだった。

暗くてよくわからなかったが、ロープは全然長さがたりていない。飛び降りるか迷っていたら、足が張り出しに触れた。

二階の窓枠か？

僕は迷うことなくその中に入り込んだ。

その部屋には誰もいなかった。すでに避難した後かもしれない。

セリを肩に担いだまま僕は出口に向かった。

突然の火事にあわてふためいた女達は、僕とセリには目もくれず消火作業に懸命だった。肩からセリを下ろすと、手を引いて人気の無い路地裏を走った。

逃げるなら今しかない。

首に巻きついていた黒い皮の首輪を外し、鎖ともども投げ捨てた。幸いな事に鍵付ではなかったのだ。

建物の間の狭い通路を進む。ごみのすえた匂いが漂っていた。

濡れた地面は滑りやすく、何度も転びそうになった。

素肌の上にカーテンを羽織ったセリも走りづらそうにしていた。

セリは僕に手を引かれるまま黙ってついてきた。

行き止まりになった路地で、僕らは立ち止まり一息ついた。

「城門以外からは抜け出す事は不可能です」

セリが言う。

「城壁を乗り越えるさ」

石を組んだ壁だ。上るのにそれほど苦労は無い。

「駄目よ。壁の上には見張りがいるわ。丸見えなんだから弓で狙い撃ちされる」

セリはどっちの味方だろう？ 僕が捕まる方がいいのではないのか？

「僕を逃がしてくれるのか？」

セリの目を正面から見つめる。

「あなたは命の恩人だわ。できるだけだけの恩返しはしないと」

恩返しか。本当かどうかわからないが、「ここは彼女に頼るしかない。」

「それなら僕のバッグを取り戻してくれないか。アリアの部屋にあるはずだ。あのバッグが戻れば……正面からだって突破できる」

「……わかりました。やってみます。あなたはここで待っていてください」

しばらく考えた後、セリは静かにそう言った。

その言葉を信じて待つか、それとも彼女を人質にして突破したほうがいいか考えるが、考えがまとまらないうちに彼女は歩き去った。

彼女に裏切られたらそれまでだ。いや、元々彼女は敵側なんだから裏切りにはならないか……

これで彼女がアリアたちを引き連れて戻って来たとしたら、素直に待つて僕はとんだお間抜け野郎だ。でももう疲れた。それでもいいや。緊張と激しい運動の連続で疲労が極限なんだろう、身体がすぐくだるい。

セリは確かに本物の女じゃなかった。そして男でもない。彼女は両性具有なのだろう。地球人類の歴史の中でも、ごくわずかな確率でそのような人種が生まれる事があつたはずだ。現代では胎児の段階で

わかるから、ホルモン療法などで、生まれるまでにどちらかに決定されるのだが……。

この星ではまれに生まれてくる両性具有者を神官の種族としているのだから。

大昔の地球でも似たような制度を持った社会が存在していた記録を見た覚えがある。人間の考える事は星が違って同じようなものなんだろう。

暗い路地にしゃがんで僕は考えた。

事の発端を。

男女が共同で暮らしていたこの星に起こった悲劇とはなんだったのか。千年前に降臨した神とは何者だったのか。

答えは簡単に想像できる。僕が不時着してたどり着いた星なのだから。

もし僕の思うとおりなら、さもありませんってやつだ。

しかし、だとしたら僕はどうすればいいんだ？今の僕は全く無力だ。せめてバッグさえ手に入れば何とかやり様もあるのだが……。

センリが去ってどのくらい時間が過ぎただろうか。

時計が無いからはっきりはわからないが、多分一時間は経過してるだろう。このまま待つか、それとも逃げるか。

バッグが無ければ、ここを脱出できたとしてもどうしようもない。少しでも可能性があるなら、センリを待つのが得策だろう。

静かな暗い路地裏に微かに足音が聞こえてきた。

センリだろうか。とにかく一人の足音だ。何かを引きずってる音もする。現れたのはセンリじゃなかった。子供のようだ。

何かの袋を引きずっていた。

「誰がいるの？」

子供のような人影が話し掛けてきた。

僕は黙ってうずくまっていた。

その人影は近づいてくる。袋を引きずって。

そして、僕のいる場所から少し離れたところの壁の取っ手を引いた。蓋のようになった扉が持ち上がる。

人影はその中に袋を投げ入れた。ごみをごみ捨て場に捨てに来たんだな。さつさへ行け。終わったら行ってしまえ。

その人影はさらにこっちに近寄ってきた。僕のすぐ側にくる。

「大丈夫ですか？怪我してるんですか？」

声だけでは性別不明だが、男の筈はない。

飛びかかって人質にしようかと身体を動かしたが、立ち上がれなかった。バランスを崩して転がった。濡れた地面の感触を左の頬に感じた。でもその冷たさもすぐに感じなくなった。

「ひどい熱だ」

声は聞こえるが、何も見えなくなった。体がひどくだるい。

その時、額に触れる冷たい手の感触だけがリアリティを持っていた。

6

何日も寝ていたような気がするし、ほんの一時間横になっていただけのよう気もする。

気が付いたときに最初に見たのは、まだ幼い少年の顔だった。

幼いといっても十二歳前後に見えた。

ここは五歳以上の男は追放されるんじゃないのか？

薄暗い小屋の中だった。

その小屋のわらを束ねた粗末な寝台の上に僕は寝かされていた。壁にかかったランプが小さな炎を揺らしている。

影がゆらゆらと動いていた。

「気が付いた？ 熱はまだ下がらないから起きないほうがいいよ。僕はマサイチ。ここには悪い女は滅多にこないから安心して」

少年はそう言っただけで僕の額に乗せてある湿った布を取り上げた。

水の入った桶につけ、布を絞ると再びそれを僕の額に乗せる。

冷たい感触が心地よかった。

「君は男なのか？ どうして追放されなかったんだ？」

僕はまず疑問に思った事をはっきりさせたかった。

「基本的に男は追放されるけど、労働力としていくらかは残されるんだ」

マサイチは僕の横にしゃがんで顔を寄せてきた。

多分大声は出さないほうがいいということだ。

「でも、男は言葉がしゃべれないはずだろ、そう聞いたけど」

「そうだよ。普通の男は五歳を過ぎれば知能の発達も止まり、言語中枢がいかれて言葉もしゃべれなくなる。でも五歳になる前にあることをすれば、女並みか、それ以上に知能も発達するし、特殊な技術にも習熟しやすい人間になるんだ」

彼はすっと立ち上がった。

「あることをすればだつて？ じゃあ男を復活させる事は簡単なんじゃないか、どうしてそれを皆にしないんだ。女の支配が壊れるからか？」

「やっぱり男の知的障害は女の陰謀だったんだ」

「男を全部僕のようにしたら人類は滅亡だよ」

マサイチは小さな声で言った。

どういふことだと聞こうとした僕を手で制して、彼はワンピースの衣の裾を持ち上げた。滑らかな太腿があらわになる。

裸の股間が見えてきた。

セリとは逆だった。彼の股間には有るべきものがなかった。

そういうことか。

マサイチは去勢されたのだ。五歳までに去勢すれば知能の発達が阻害される事もないというわけなのだ。

「僕はどのくらいここに寝てたのかな」

次に気になってる事を聞いてみた。

「昨夜ここに連れてきた。もうすぐ夜が明ける時間だよ」

そんな時間に時間がたつたのか。セリはどうしただろう。

セリの事が気になる。バッグは取り戻してくれたのだろうか。

しかし……

「そうだ。君一人で僕を担いできたのか？ 確かに僕はそれほど重くないけど、君はいかにも非力そうだ」

「僕一人じゃ無理だったよ。サンダンスの手を借りたんだ」

少年の言葉の後、入り口が開いて女が一人入ってきた。

筋肉のついた太腕、首筋も太い。強そうな女戦士だった。

「大丈夫。私はあなた達の味方よ。女は皆男嫌いという訳ではないからね」

サンダンスというその女は優しく微笑んだ。

僕は起き上がろうとした。優しく笑っているとはいえ女戦士は敵だという固定観念があつたから自然に身体がおきようとしたのだ。

でも起きられなかった。まだ身体がだるい。熱も下がっていないみたいだ。

「起きないで。とにかく休んでいないと駄目だ。治らないかもしれない」

いけど……」

マサイチの言葉は何か隠してる様子だった。

「僕の症状に何か心当たりがあるんだね、教えてくれないか」

少し迷った後、マサイチは言い始めた。

「五歳以上の男の子がかかる病気に似ている。熱が出て、動けなくなる。そして言葉もしゃべれなくなっていくんだ。ただの風邪じゃない。掌にうつすら斑点ができるのが特徴だよ」

マサイチは僕の掌を見つめて言った。

その掌には確かにうつすらと赤い斑点が見えていた。

「センリを連れてきてくれ。センリを知ってるだろう。あの子にバッグを持ってくるように頼んだんだ。そのバッグがあればこの病気も治療できるはずだ」

後ろに立っていたサンダンスが僕の言葉に答えた。

「センリは知ってる。何とかしてみるわ」

意識がだんだん濁ってくる。このまま意識がなくなってしまうえばそのまま知能が後退してしまつて僕は僕でなくなるのではないか、そんな不安が僕の背筋を凍りつかせる。寒気がする。熱が出てるせいだろうけど、身体のふるえが止まらなかつた。

7

次に目がさめたときには部屋には誰もいなかった。

意識はまだはつきりしないが、休んだおかげで気分は良くなつてきた。外の光が見えないということは、すでに日が沈んでるのだろう。

昼間の間中寝ていたということだ。

少しだけすつきりした頭で考えてみると、マサイチやサンダンスの

僕を見る目はこの星では異常なんじゃないかと思えてきた。大人の男は野生の獣で、食料にさえしていると云うのに……。

センリは、僕が話せるとわかつてもずつと怖がつていた。

それなのにマサイチもサンダンスも僕を怖がる気配もなかつた。

僕の事をすでに噂で聞いていた可能性は高い。

話の出来る男がつかまつたという噂。

でも、それはしゃべるライオンが発見されたというニュースに近いはずだ。

センリの対応の方が理にかなつてる気がした。

それとも、あの二人はセンリも知らないような事を何か知っているのだろうか。

足音がして、ドアがきしみながら開いた。

最初に入ってきたのはセンリだった。すぐ後にサンダンスとマサイチが続いた。

「タケル、大丈夫？」

センリはすぐに僕のベッドに駆け寄りひざまずいた。

ただでさえ白い顔が青ざめていた。

「バッグは持ってきてくれたのか？」

センリはうなずいて黒い非常持ち出しバッグをベッドの上に置いた。

よかつた。これさえあれば……。僕は安堵のあまり気が遠くなりそうなのをぐっとこらえて、震える手でバッグを開けた。

きな臭い匂いがした。

照明弾が一発発射されていた。

やはりセンリの部屋に打ち込まれた火の玉は照明弾だったのだ。

多分アリアがいじっているうちに暴発したのだろう。

白いプラスチックで出来た万能治療器を取り出す。

しばらく機械を操作したあと、僕はその尖った先端を自分の腕に押

し当てた。この病気がウイルス性なのはすぐにわかった。

そしてそのワクチンを作り、今それを注射した。

これでいいはずだ。多分二時間もすれば僕は回復するだろう。

「ありがとう。センリ、それにサンダンスとマサイチ。僕は何とか助かりそうだ。そしてこの星の男たちを助けることも出来そうだよ」

僕が笑いかけると、センリは泣きそうな顔に笑みを浮かべた。僕のことを心配してくれていたのだろうか。

「男たちを助けるって、ひょっとしてその機械はワクチンを作れるの？」

「オクターブ高くなった声でマサイチが聞いてきた。

「ワクチンだって？ 彼にはそんな知識まであるのか？」

「君はこの病気がウイルス性だということを知ってたのか？」

「もちろんわかってるよ。僕は医者だから。去勢された男は、その高い知性かわれて知的労働をやらされるんだ。科学者や、医者や、僕はまだ見習いだけだね」

マサイチの後をサンダンスが引き継ぐ。

「アリアたち神学者戦線は過去に降臨した神の言い伝えどおりに男を殺す政策を進めてるけど、その引き金になった男の墮落は、陰謀によって作られたウイルスが原因だとにらんでいたのよ。あたし達、男性開放同盟はそのウイルスの正体を探るためにもう何年も地下活動をしてきたの」

「マサイチが男を助けたいのはわかるけど、サンダンス、君たちはどうして？」

「男性開放同盟がどうして命がけで男を救おうとしてるかですって？ そんなの決まってるじゃない。男が好きだからよ」

サンダンスの笑顔は、この星の男女関係について絶望に向かいつつ

あった僕の気持ちを手繰り寄せ、希望をもたせてくれた。

「そうだ。まだ男と女が愛し合える星に変える余地は残されているんだ。たとえここが地球ではないにしても、男と女が殺しあうような世界をそのままにはしておけない。」

「それにしても千年も前に降臨した神の教えが未だに古びてしまつてとなく実行されているのは奇跡だよ」

熱が下がり、僕は気分がよくなつてきた。それに頭の中に漂っていた霧も晴れてきたみたいだ。そうしてみると、これまでのことで変に思えることがいくつかわかれば上がる。これまでで変に

「実は……、神が降臨したのは千年も昔のことじゃなくて、五百年程前のことだと思えます。周りには大げさに言ってますが……」

センリの言葉だった。

「なるほど、神秘性を高めるために実際より古い史実にするやり方ね」

太い腕を腕組みしたサンダンスがうなづく。

「それだけじゃありません。神は何年かに一度、今でも霊廟に現れて、アリアたち神学者戦線の幹部に指示を与えているんです」

センリのその言葉は衝撃的だった。マサイチも唖然としていたしサンダンスも組んでいた腕をダランと落とした。

僕の想像は間違ってたんだろうか。まさか千年も生きる人間がいるわけがない。五百年でも同じ事だ。

細胞復活剤を最大限に活用しても、せいぜい三百年が限度のはずだ。

ワクチンを投与して約二時間が過ぎた。その間に僕の病気はすっかり完治していた。僕は起き上がり、バッグの中から武器を取り出し武

装した。そして食料カプセルを一口に放り込んだ。

今度はあのアリアたちを震え上がらせてやる。男をなめた罰を与えてやるのだ。

「今からその霊廟を見学にいこう。僕の想像が当たってるか確かめたいんだ」

これからどうするつもりですかと聞くセンリの僕は答えた。

「それは無茶だわ。あたし達も一緒に戦うけど、それでも人数が少なすぎる。あなたが武器を持つてるのはわかるけど、多勢に無勢よ。装備で劣ってるからといってアリア達を見くびっていたら、またつかまってしまうわ」

サンダンスの言葉だ。サンダンス以外にも数は少ないが、共闘してくれる男性開放同盟員がいるらしい。

「そうだよ。ここは一旦町から脱出して、男たちを組織するんだ。ワクチンで男たちを治療すればいいんだよ」

マサイチも、ここは引くべきとの見解だ。

センリを見た。センリは黙ってうなずいた。

「君はどうするつもり？アリアの所に戻るのかい？」

僕の問いに今度は首を振った。

「バッグを持ち出したのが私だというのはすでに気づかれてるでしょう。私はもうあそこには戻れません」

センリは悲しんではいけないようだった。今までの自分の生活がこんなに碎かれてしまったというのに、むしろ晴れ晴れとした表情だった。

脱出路はマサイチが案内してくれた。

僕は武器も戻ってきたし、派手に正面突破を試みたかったのだが、戦いを避ける方法があるのに、それをしないのは愚かだという彼の言葉に説得させられたのだ。

都市が作られるときは、必ず外敵の侵略に対して逃れる避難路が造られる。

そして長い間使われないうちに、それは忘れ去られていく、という説明だった。

鍾乳洞のように滑らかな岩肌の洞窟を、僕とサンダンス、それにセンリとマサイチの4人で滑ったり転んだりしながら、僕の持つライトの光だけを頼りに進んだ。

サンダンスはマサイチの手を取り、僕はセンリの手をしっかりと握って歩いた。

センリの手の感触は、久しぶりに感じる繊細な女性の手だった。

時折転びそうになるセンリの腰を僕は抱き寄せた。彼女のくびれた細い腰を抱きしめるのは、僕にとっては久しぶりの快楽だった。

彼女にとっても嫌なことじゃなかったはずだ。僕に甘えるように横顔を僕の胸に付ける彼女を見て僕はそう確信した。

この星は変な星だ。

女はアリアやサンダンスのようにたくましく、強くて、半分だけど男の遺伝子を持ったセンリがずっと繊細な女性のイメージなのだから。

確かに地球も僕が宇宙船に乗り込む時代には、かなり女が強くなっていた。メアリーみたいな女権主義者はさすがに少数だったけど、男に政治を任せている戦争が絶えないから、男に被選挙権を与えるべきではないという論調がむしろ正論になり始めていたのだ。

僕のいた時代にもセンリのような、いわゆる男の考える理想の女性というのには珍しい存在だったのだ。地球もあのまま進んでいけばこの星のように男は不要と思われる時代がきたんだろうか。
こんなに極端な世界が？

二時間ほどかけて洞窟を歩き、重い岩の扉を開いて出た所はジャングルの中だった。草の匂いが懐かしかった。

「今日はここで休みましょう。食料を調達してくるわ」

少し開けた場所になると、サンダンスが荷物を岩の上に置いてそう言った。マサイチは小さな岩をいくつか寄せ集めて火を起こそうとしている。センリは慣れない行軍に疲れたのか、脚を伸ばして座り、自分でマッサージを始めた。

「大丈夫かい、あまり長く歩いたことないんだろう」

僕がセンリに向かい合って座ると、彼女は顔を赤らめ、ふつと横を向いた。手を伸ばして、センリの脚をもんでやった。

彼女は最初恥ずかしそうに避けようとしたが、すぐに僕のするに任せた。ゆったりした衣を膝の上まで捲り上げ、センリの柔らかいふくらはぎと太ももをマッサージする。親指に力を入れて、指圧も混ぜて丁寧にもんでやった。

ふと見ると、センリの股間は膨らんでいた。

「ごめんなさい。……恥ずかしい」

センリは脚をどけようとしたけど、僕はそうさせなかった。

「明日もかなり歩かないといけないんだ。疲れを残したら駄目だよ。少しずつ上のほうまでマッサージの手を伸ばした。」

膝から上に裾をめくりあげ、太ももまで露出させた。

サンダンスはまだ帰ってこない。マサイチは気を利かせてるのか離れた場所で囲炉裏を作ることに没頭している。

自然な風を装って、手を太ももから彼女の股間に移した。そして既に最高に勃起してるそれを優しくつかんだ。

小さな睾丸をもみ、その奥の肛門の手前にある亀裂に指を添えた。

あ…、そこは…

センリは言葉にならない呟きをかすかにもらす。

そこはすでにぬるぬるになっていた。

片手を千里の首に回して、キスしようと顔を寄せると、センリは赤い顔で目をつぶった。舌を絡める。最初はたどどしかった彼女の舌が、すぐに情熱的に僕の舌を熱く絡めとり、吸い付いてきた。

キスしながら、センリのたけり狂ってる部分を優しく握りしごきあげる。センリの息が荒くなる。

片方の手をセンリの背中から回し、その小さな乳房をもんでみた。ちよつと固めの乳房は先端の部分を隆起させている。

そこをつまむようにするとセンリのうめき声がさらに高くなった。いとしさを感しながら僕は顔を離す。

ゆったりした衣を大きく引き上げる。センリの腰も持ち上がった。ふんわり胸まで露出した。くびれたウエストの下の股間に僕は顔を移す。勃起したセンリのペニスは先端をねばねばした液体で濡らしていた。赤味のかかった肌色をしたかわいい亀頭を口に含む。

センリが大きく息をはいた。

宇宙船の中でいつもやってきたように僕は彼女のペニスを口で愛撫した。思ってたなかった時にいきなりセンリがはじけたので僕はセンリの精液を肺に吸い込むところだった。激しくせきが出る。

「ごめんなさい。大丈夫ですか」

心配そうに覗き込むセンリの顔は、今までで最高にかわいく見えた。

サンダンスが二匹の野ウサギに似た小動物を捕まえて帰ってきた。手馴れた手つきで皮をはぎ、解体する。女の城の奥で、捕まった男たちもこんな風に解体されていたのだ。

とても見ていられずに逃げたけど……。それを思うと食欲が失せてしまった。

「マサイチ、後はお願いね」

サンダンスが解体した肉をマサイチに渡した。

それを受け取った彼は、木の枝のくしを通して囲炉裏で火にあぶりだす。しばらくして心地よい匂いが漂ってきた。肉汁が滴り火の中ではじける音がする。

「タケル、食べないの？」

手をつけない僕にセンリが聞いてくる。

「僕はカプセル食がまだ残ってるから大丈夫だ」

心配する彼女を適当にごまかして、僕はこみ上げてくる吐き気を必死でこらえていた。

焚き火の明かりに照らされた狭い空間の上には、降るような星空がのぞいている。

空腹感と吐き気に悩まされながら、僕は寝そべってなんとなく空を見上げた。

星がきれいだ。

あれは、カシオペア座。あつち白鳥座だ。

……。変だ。なぜだ？ ちょっと似てるなんてもんじゃない。

あれは確かにカシオペア座だ。

でも、ここは地球じゃないんだぞ。はるかに離れた場所のはずなん

だ。それなのに地球から見ると同じ星座が見えるなんておかしい。

ここは太陽系からも遠く離れた別の星系のはずなんだ。

これは偶然だ。奇跡に近いことだけど、ごくまれに起こりうる偶然に違いない。

でも、もしここが地球だったらどうだろう。

千メートルに及ぶ高層建築も、その残骸もなにもない。ということ
は過去の地球？

あの磁気嵐で時空の割れ目に入り込んだのだから、過去に飛ばされた
たということはあるのかもしれない。

だとしたらここは少なくとも二千年いや三千年くらいは昔のはず
だ。とにかくここでいろいろ考えていても始まらない。

例の霊廟とやらにいけば、真相が見えてくるだろう。

多分彼女に会える筈だ。生きてはいないだろうけど、そのミイラく
らいには……。

9

まどろんでいると草の動く音がした。

僕は寝転んだままゆっくり電気鞭をホルダーから取り出す。

また音がした。虫の声に混ざって地面を擦るような音も少しずつ近
づいてくる。

センリは僕にびったりくっついて寝息を立てている。

マサイチもまだ寝てるみたいだったが、サンダンスは横になったま
ましっかりと目を開いていた。

僕に向かって軽くうなずく。さすがに女戦士は危機に敏感なんだ
な。こっさり剣を抜いて右手に持っている。

ゆれる焚き火の光の中にみつつの人影が浮き上がった。

肉の焼けるにおいに誘われてきた男たちだろう。追手じゃないのはすぐにわかった。棍棒を持っている。

彼らは、ゆっくりと僕らの寝てる場所に近づいてくる。棍棒を振り上げる。それを振り下ろせば確実に殺せる位置まで、じわじわと寄ってきて来る。

僕はサンダンスが動くより早く起き上がり、電気鞭を彼らに浴びせた。

サンダンスに任せれば剣で殺しかねないと思っただからだ。

麻痺にセットされた電気鞭をくらって三人はうめきながら倒れる。

起き上がるうともがくが腰から下の神経が麻痺しているから座ることもできずにいる。彼らのうめき声でマサイチとセンリも起きだしてきた。

周囲でたくさんの草を踏む音が遠ざかっていった。

一瞬にして倒された三人を見て、仲間たちは慌てて退散していったのだ。

「ここをこうして、そしてこれがワクチン摂取のボタンだ。わかったかい」

マサイチに説明しながら、僕は三人の男たちに万能治療機を使った。三人がどうなるかはわからない。

病気が治っても話ができるようになるとは限らない。話ができても、五歳以上に知能が発達していかないかもしれない。

結果がわかるまで約二時間、僕は交代で眠りについた。

手足を縛られた三人の男たちは、最初がたがた震えていたが、徐々に落ち着き、ゆっくりと眠っていった。

濃紺色だった空が灰色に変わっている。

うつすらとした光が闇を溶かし、やがて朝と呼べる時刻に移ろうかとしていた。

三人の男たちの変化は劇的だった。ワクチンは確かに効いていた。獣の光をぎらぎら発散させていた眼はそこにはなかった。

落ち着いた知性に彩られた涼しい眼をした三人の男は僕たちに挨拶をし、そして礼を述べた。

「霞がかかったようだった、ずっと。考えようとしても言葉が浮かばないんだ。言葉がなければ考えもまとまらない。そして体の外側から本能で自動的に動く自分を見ていたんだ。君たちが病気を治してくれたんだな。本当にありがとう。礼を言っよ」

三人の中でもっとも年長の男が代表してそう言った。頭髪にやや白髪が混じってる男だ。

「理想的な展開だね。脳自体の発達は阻害されてなかったんだ。言葉の中枢を麻痺させるだけだったんだね。これならワクチンさえ打てばすぐに男の軍団を組織できる」

マサイチは今にも歌いだしそうな声で、そう言った。

そして一カ月後、男達の軍団は五百人を超えた。

もちろん、知性を兼ね備えた男の軍団が形成されるのをアリア達も黙ってみていたわけじゃない。何度か女達の襲撃があった。

しかし、落とし穴を掘ったり周囲から回り込んだりする戦法を自由に操る男の軍団の前に、アリア達はたいした戦果を上げることなく撤退していった。

「ほら、もっと腰を入れて、槍は下からえぐるように突き通すんだよ」

広場ではサンダンスが兵士を鍛えている。

知能が戻ったからといってすぐに戦えるわけじゃない。

彼らは武器の使い方から格闘技まで、サンダンスに一から教わっていた。組み手の実技でサンダンスに投げ飛ばされた男が、僕の足元まで転がってきた。

「大丈夫かい？」

僕が手を取り起こすと、まだ若い彼はうれしそうに笑顔で答えた。

「楽しいよ。早く一人前の戦士になりたい」

男達は例外なくサンダンスの訓練を嬉々として受けていた。

やはり男は戦うのが大好きなのだろう。生まれつきの戦士なのだ。

これなら数の上で少くらしい女達に負けても、実力でひっくり返せるかもしれない。男達はサンダンスの訓練で見る見るうちに戦闘力を高めつつあるのだ。

このまま順調に男の戦士が増えていけば、アリア達も男の軍団とまともにぶつかるのは厳しいとわかるだろう。そうして和平の条件がそろろう。

男と女が平等に暮らしていく、そんな以前の状態に戻る時が来るだろう。

でも、僕のそんな計画を覆したのは女の軍団ではなく、僕らが手塩にかけて育て上げた男の戦士たちだった。

ある日、昼食を済ませて一息ついていると、最初にワクチンをつたれた男、ヤブが僕らの小屋に入ってきた。

小屋には僕とセンリ、それにマサイチがいた。サンダンスは男の兵士の訓練のために出ていた。

「もう食事は済んだみたいだな。実は少し話があるんだ」

ヤブは白髪混じりの頭を掻きながら言った。フケがはらはらと落ち

る。

「先制攻撃の件なら、駄目だといったはずだぞ。男と女が戦うのはもう止めにするんだ。こつちが強力になれば、アリア達だって簡単には攻めてこれないんだから」

僕の言葉をヤブが手を上げて制する。

「あなたは本来この星の人間じゃないんだ。あなたには感謝してるが、我々は自分達でこの星の秩序を新しく作り変えることにしたいんだ」

「駄目だよ。憎しみに駆られて戦争したら男も女も全滅してしまう。タケルに任せておいた方が冷静に対処してくれるよ」

横からマサイチが割って入った。

「我々はアリア達に狩られ、殺され、いたぶられてきたんだぞ。その苦しみを忘れるというのか？ 女に飼われていた玉無しに何がわかる」

ヤブは声を荒げて、マサイチをにらんだ。

いつになく荒れてるみたいだった。

彼は何か言いたそうにしているセンリまでにらんで続けた。

「悪いがあんたにはもう従えない。あんたの宇宙船は沼から引き上げるだろ。あれで故郷の星に帰るなり何なりしてくれ。ここに居てもいいが、我々の邪魔をすることは許さない」

クーデターだった。

いつのまにか僕の知らない間に彼らは合議し、ヤブを首長に決めたのだ。逆らう気も起きなかった。

ヤブの言い分にも一理あると思ったからだ。所詮僕はこの世界の人間ではないんだから……。

しかしヤブが言うように、沼から引き揚げた宇宙船で地球に戻ることは不可能だった。引き揚げた時いるいるやってみただ、コンピュ

「ターは死んでるし、宇宙空間に出るだけの燃料も残っていない。せいぜい近場を飛び回るくらいしか出来ないのだ。」

「ヤブは入ってきたときと同じようにぶっくらばうに出て行った。センリとマサイチが心配そうに僕を見ていた。」

「ワクチンウイルスを作ったのはやっぱりまずかったかな」

「マサイチが沈黙に耐えられない様子でぼつりと言った。」

「そうね。あのウイルスをばら撒いたから、いちいちワクチンうたなくても病気が治るようになったわけだから」

「センリが同調する。」

「いや。あれはあれでよかったんだよ。どっちみちいずれはこうなる運命だったんだろう。マサイチ、サンダンスを呼んできてくれないか、今後のことを話し合おう」

「僕の言葉にマサイチは立ち上がり、光のあふれる小屋の外に出て行った。」

10

「今から思えば、反乱の予兆はあった。」

「十日ほど前の天気の良い日に、僕のそばに来たサンダンスが言っていた。」

「あの、ヤブって男。注意した方がいいかもしれないよ。目つきに怪しい光が感じられる」

「その頃、僕は沼から引き揚げた救命艇のメンテナンスで忙しくてサンダンスの心配そうな顔にもあまり注意を払っていなかった。」

「訓練でかかってくるときも、他の男と違って殺気を感じるんだよ」

「それだけ熱心なんだからいいことじゃないか。あ、そのバケツとつてくれないか」

「救命艇は当然だが泥だらけだった。とりあえずきれいな水で洗浄し、きちんと乾燥させることからはじめないといけない。コンピュータはまず駄目だろうけど、機関系が死んでなければヘリコプター代わりに飛ぶくらいはできるはずだ。」

「僕の反応はサンダンスの期待するものじゃなかったんだろう、サンダンスはバケツも取ってくれなかった。一つため息をつくると去っていった。」

「船のメンテナンスには約二週間かかった。」

「それまで男の兵士達の世話は三人に任せきりだった。」

「訓練はサンダンスに、医療はセンリに、そして科学や学問はマサイチに、それぞれ任せていた。僕は兵士達と面と向かって会うことさえほとんどなかった。」

「最初は救世主が現れたと、僕のことを畏敬の念を持って接していた彼らも、そうこうしているうちに、僕への興味は失せてしまったのかもしれない。」

「ヤブには注意した方がいいよ」

「次に僕に忠告してくれたのはマサイチだった。」

「彼は仲間を集めてるみたいだ。派閥を作ってるんだ。彼の考えに傾倒している男たちも何人かいるみたいだよ」

「ヤブって誰だっけ」

「僕は昼下がり、木陰でセンリの持ってきてくれたお茶を一口すすり、休憩していた。」

「最初にワクチンをうたれた男だよ。中年の白髪の男だ」

「それで、彼の考えってのはどついつの？」

船のメンテナンスも一区切りして、あとは試運転を試みる段階だった。

試運転の事で頭がいっぱいだった。

もしエンジンがうまく始動できなかったら、八番プラグと九番を交換してみよう。

方向舵が聞かなかった場合を考えて、予備のバッテリーを太陽電池で充電しておかないと……そんなことばかり考えていた。

「ヤブは女達を皆殺しにすることを考えている」

マサイチの言葉に驚いてセンリが横から口をはさんだ。

「そんなことしたら人間は滅亡するじゃないの、彼はそんなこともわからないのかしら」

「わかってるさ。子供を生めるのは女だけだということくらい。でも女は女だけじゃないと思ってるんだ」

空想から僕は引き戻された。

「意味不明だな。どういうこと？」

僕の関心を引けて、マサイチは少しだけ気を良くしたようだ。

わざとらしく咳をして、人差し指でセンリを指した。

「私？ 私たち神官に生まれようというの？」

それだけ言っただけセンリは絶句した。

「色が悪い。本当はどうなんだろう。そんなこと出来るのだろうか。」

「産めるのかい？」

単刀直入に僕は聞いてみた。

その質問は不躰ですと怒られることはもうない。僕とセンリはそのくらいには親密になっていたのだから。

「わかりません。考えたこともないわ。でも、昔神官が子供を産んだという記録を見たことはありません。だから神官は完全な人間だとい

ことになってるんです」

「ただの伝説かもしれないな。あまり信用は出来ない」

言葉を切ってお茶をもう一口飲んだ。

「いや、本当かどうかは問題じゃないんだ。彼らがその話を信用すれば、本当になるんだよ。そして女性不要論に固まった彼らは、その凶悪な思想に拍車をかけることになる」

マサイチはどうしたいんだろう。僕にヤブを処刑しろでも言う気だろうか。

そう僕が聞くと、マサイチは急にそわそわした。

「いや、そこまでは言わないけど、注意しておいた方がいいと思って……」

結局様子を見るしかなかった。

そして五日前のことだ。

夕方自分の小屋でくつろいでいると、ヤブが入ってきた。

小屋の中にはセンリも一緒にいたが、ヤブはセンリには目もくれず僕に話し出した。準備は整ったから早く先制攻撃をかけようということだった。

「船は飛べるようになったんでしょう。それで奇襲をかけて城門を開いてくれれば一気にだれ込んで我々の勝ちです。あの傲慢な女達に復讐してやりましょう」

言葉は丁寧だったが、ほとんど命令されてる感じだった。

駄目だと言って即座に却下した僕を、彼は血走った目でにらんだ。何か言いたげだったけど、その時はそのまま何も言わずに引き下がった。

それから一昨日のことは事件と言ってよかった。

船の試運転でエンジンをかけていると、セリが息を切らせて走ってきた。

その形相で只事ではないとわかったので、すぐにエンジンを切ってセリの話聞いた。

「大変よ。昨日落とし穴で捕まった女戦士を公開処刑するって言うて広場に……」

セリは息が切れてそこまでしか言えない様だった。でもそれだけ聞けば十分だ。

僕はセリを操縦席の奥に押し込むと、急いでエンジンをかけた。「サングラス達は何をしてるんだ」

僕の言葉はそのつもりは無くても叱責する口調になっていた。

「磔にされた女戦士の前で、止めさせようとがんばってる。でも大勢の男達に押し切られそうなのよ」

「それで、男達の先頭にたってるのはヤブってわけ？」

「そうよ。あの男はやっぱり危険だったのよ」

音も無く浮き上がる船に、セリは僕の後ろで小さく悲鳴をあげた。

一瞬体重が重くなり、次に浮き上がるような不安定な感覚は初めてだったのだから当然だ。

久しぶりに操縦する船は、今までの船とは全く別物のようだった。

コンピューターが死んでるので、完全な手動制御なのだ。

今までどれほどコンピューターに助けられていたのか、その時やつとわかった。

右に曲がりたいのにまっすぐ飛んだり、着陸したいのに斜めに船体がずれて墜落しそうになったり、たぶん息を切らせて走ってきたセリの倍以上の時間がかかったことだろう。

その性だろう、僕が広場に着陸したときにはすべてが済んだあとだった。

サングラスは唇から血を流して肩を落としていたし、マサイチは涙を流して地面を叩いていた。

広場の中央には十字架が立てられていたが、そこには女の身体は打ち付けられていなかった。しかし、そこにさっきまで生身の身体がはりつけられていたことは、血の跡で一目瞭然だった。

女戦士は広場の中央で、血まみれになって死んでいた。大きく割り広げられた股間からは、血に混じって多くの白い粘液がたれていた。

男たちによってたかって犯されたのだ。

この男たちは女性にはセックスアピールを感じないと思っていた

僕は、浅はかだったのかもしれない。いくら慣習ではないといっても、身体が覚えている行為は完全には抜けないだろうから。

男たちは女戦士を大勢で犯すことで、自分達のアイデンティティを

取り戻せると思ったのだろうか。

そんなアイデンティティは、消し去り葬るべきものなのに……。

男女平等という考えはやはり幻でしかないのだろうか。

「遅かったな。いい見ものが見れずに残念でした。タケルは反対して

いたが、我々の信念を貫くためにはこうするのが一番だったのだ」

ヤブが僕の方に近づいてきた言った。

力いっぱい放った僕のパンチは軽くかわされた。

「おっと。殴られてやってもいいんだが、ついよけてしまったよ。反

射神経つてやつだな」

彼の言葉の中には、助けてもらった恩義はすでに感じられなかった。周囲で見守る男たちの中には、僕の方に同情の目を向けるものも

いくらか居たから、全員がヤブの手下になったわけではなかったらう。まだ回復の余地はあったのかもしれない、その場でヤブを処刑するとかすれば……。

もちろん僕にはそんなことをする義務も権利もないと思うが……

それからたったの数日の間に彼は兵士達をまとめ上げ、クーデターに成功したのだ。僕らが思っていたよりも、男たちの女を憎む気持ちは大きかったということだ。

考えてみればそれも当然かもしれない。愛するものを捕らえられ、殺された男も数え切れないくらいいるだろうし、自分自身が殺される恐怖に怯えることも何度もあっただろうから。

マサイチに呼ばれてサンダンスも帰ってきたが、話し合っても結局どうにもならないということに落ち着いた。

様子を見るしかない。

11

虫の鳴き声が耳につく。夜になった。

僕らの小屋の外で三人の兵士が見張りに立っている。

僕らのことを見張ってるのだ。ヤブは考えを変えたのかもしれない。僕らを逃がしたら、アリア達の方に寝返る恐れがあると……。

「連中、いよいよ女の城に攻め込むつもりらしいね。兵隊達の神経がぴりぴり張り詰めてるのがよくわかったよ」

サンダンスは小声で言った。

サンダンスにも、訓練は今日で終わりだとヤブから告げられていたのだ。そして、しばらく小屋にこもっておくようにと、やわらかく命令されていた。さんざん訓練をつけてもらって、いざという時は信用できずに閉じ込めておくというのだ。

いくら攻撃の日は極秘事項だといっても、サンダンスも釈然としないものがあるだろう。

「ふう、このままじゃいらいらして眠れないよ。マサイチ、ちょっとこっちに来ていつもみたいになんかやってくれない？」

サンダンスは下着を脱いで、足を開いた。

僕やセンリに気兼ねすることもなく、マサイチを自分の股の間に呼び寄せる。

マサイチはちらりとこっちを見てうつむくと、サンダンスの足元にじり寄った。サンダンスには恥じらいは無いみだだった。

今まであたりまえのこととしてやってきたことを我慢する理由も無い。そんな感じだ。

サンダンスの広げた足の間にマサイチは顔を入れた。

そして彼女の股間を音をたてずに舐め始める。

センリは僕の側で切ない顔をしていた。

マサイチは屈辱を感じているのだろうか。

僕が同じように命令されたとしたら、即座に拒否するし、無理やりやらされたら悔しさに涙が出てくるだろう。

でも、それは僕の育った世界の環境がそうさせるだけだ。

ここでは女戦士が人前も憚らずマサイチのような少年を快楽の道具に使うことは、なんでもないことなのかもしれない。

でも、マサイチは僕に対して恥ずかしそうにしていたし、センリは

切ない顔をしている。僕という異分子が入ってきたせいで周囲の感覚が少しずつでも変化していつてるのかもしれない。

それが何を意味するのか、または何の意味も無いことなのか、深く考えてる場面じゃなさそうだ。

サンダンスの喘ぎ声を聞きながら、という今は……。

物音がした。床下で誰かが動く気配がしている。

高床式のこの小屋には床下に空間があるが、それでも一人もぐりこむスペースは無かったはずだ。

サンダンスは股間に入っているマサイチを左手で制止し、右手で剣を音もなく抜いた。

静かに立ち上がると、サンダンスは部屋の隅に移動した。

部屋の奥の方で、窓から入る月明かりの中、床板の一部がゆっくりスライドするのが見えた。

襲撃か？それとも？

サンダンスは剣を抜き、一撃で侵入者を殺せるように上段に構える。ゆっくりと床から湧き上がってくる侵入者に、僕はいきなりライトを浴びせた。男だった。名前は確かウイリーといったはずだ。

「さて、敵じゃない。話を聞いてくれ」

ウイリーはライトをさえぎるように左手を上げて小声でそう言った。

「手短に話すよ。時間が無いんだ」

ウイリーは僕らの返事も待たずに話し出した。

「君たちは危険だ。ヤブが君たちを暗殺しようとしている。理由はわかるだろ。タケルがいたら自分の支配権が確立できないからだ。いつまた変な病気をはやらせられるかわかったもんじゃないと思ってるん

だ。そんな回りくどいことせずとも、タケルの武器を使えば、もっと簡単だけどね」

「それはわかった。でもおまえはどういうつもりだ」
サンダンスが聞いた。

「ヤブは女達を虐殺し、今までの復讐を果たすことに凝り固まっている。でも、俺達はそれじゃ物事は解決しないと考えている。以前の、男と女が平和に暮らせる時代を取り戻したいと考えているんだ。でも、表立ってヤブには逆らえない。そんなことしたらすぐに裏切り者だと決め付けられて処刑されるだけだからだ」

「今までもそんな風に処刑された男がいたのか？」

僕の質問にウイリーは、ふふ…とむなしい笑顔を向けた。

「訓練中に事故がおきて死んだり、落とし穴を掘ってる途中で穴に落ちたり、そんな風に死んだ男はほとんど俺達の仲間だった」

なるほど、女の軍団も一枚岩じゃなかったけど、男の軍団も同じというわけだ。

権力者に反抗する反体制グループというのはどんな小さな集団にも自然に発生するものかもしれない。

「時間が無い。早く来てくれ」

穴に再びもぐりこもうとするウイリーをサンダンスが止める。

「あたしが先に行くよ。お前は二番手だ」

サンダンスが先に穴に入り、その後で、皆が続いた。

ウイリーに裏切られるのを警戒しているのだ。先に穴に入った人間がはじめに穴を出る。そのとたん矢の雨じゃ、こっちはいちころだ。

二十分くらい、穴倉をよつんばいで進んで、出たところは林の中。平たい岩をどけてサンダンスをはじめに一人ずつ穴を這い出た。

出た場所には兵士が二人死んでいた。

ウィリー達のグループがやったのだろつ。ウィリー達も勝負をかけるのだ。

当初の男対女という図式から、男対女対男女平等グループと、少し複雑になってきた。ウィリー達はサンダンス達と共闘できるはずだ。どちらも男女平等の世界を目指してるのだから。そうすると数的にも男や女の軍団に対抗できるくらいに強くなれるかもしれない。僕が誰に味方すればいいか、やつとはつきりしてきた。

12

ウィリーの案内でジャングルの中の小道を進む。

坂を登りきると、開けた場所に出た。そしてそこには十数人の男達が待っていた。

ウィリーの仲間達だった。

「これで仲間全員？」

予想より少ないようだ。

「いや、まだいるさ。今後のことを話し合おうと思って主だったものだけ集めてみたんだ」

ウィリーは言いながら合図した。

遠巻きにしていた男達が寄ってくる。

見知った顔が何人かいた。

「攻撃は明日の早朝の予定なんだ。このまま行くと女達は不意をつか

れて全滅しかねない」

焚き火を囲んで車座になると、最初にウィリーが言い出した。

「そう簡単に女達はやられないよ。だいいち城門をどうやって突破するつもり？」

サンダンスが言う。

「あいつらタケルの武器をこっそり拝借して爆弾をいくつか作ってるんだ。それで城門を吹っ飛ばす。後は火矢で街を焼き払う。同時に裏側からも同じように攻撃するつもりだ」

すぐに僕はバッグを開けて確かめてみた。

一瞬何の変わりもないように見えたが、次の瞬間僕の頭に一気に血が登ってきた。

照明弾は一見本物のようだが、巧妙に似せて作られた木製の偽者だったのだ。

今まで気づかなかったなんて。なんて間抜けなんだ。

多分照明弾に手を加えて爆弾に仕立て上げたんだろう。

悪知恵の働くやつらだ。

「とにかく女達に襲撃の事を知らせないといけないね。何とかして戦争を止めさせないと……。でもどうやって知らせるか」

サンダンスは太い腕を胸の前で組んで難しそうな顔をした。

「そうだ。タケルの救命艇で城にのり込めばいいよ、あそこまでぐらいいなら飛べるんでしょ？」マサイチがすかさず言った。

「ああ、あれは音も静かだから、夜のうちなら見張りに見つからずに城内に入れるだろう。僕とサンダンスが城にのり込んでアリアと話し合うことにしよう」

「私も行きます」

僕の言葉にすぐにセンリが反応した。

思いつめた眼が僕を見つめている。

「それは無理だ。もともと一人乗りなんだ。サンダンスを詰め込むのがやつとだよ」

「中に乗れないんなら外側につかまるから大丈夫です」

「いや、それこそ危ないよ。僕は大丈夫だ。アリア達に簡単にやられたりはしないよ。君はここで待っていてくれ」

「わかりました」

セリは唇をかんでうつむいた。

「そうと決まったら早いところ沼地まで行かないとな。今のうちならタケルの船には警備はついてないはずだ。攻撃準備に忙しいからね」

ウィリーが締めくくり、皆が立ち上がったときだった。

三十メートルくらい離れたジャングルの中から声がした。

「その必要は無い。おまえたちはすでに包囲されている。おとなしく降伏しろ」

ヤブの声だった。

声のした方向にヤブが現れ、じわじわと他の大勢の兵士達が姿を見せ始めた。

ヤブ以外の兵士達は今すぐにも矢を発射できる体勢で、目いっぱい弓を引いている。当然ねらいはまっすぐに僕らに定まっていた。

風が吹いて、弓の弦のきりきりいう音まで聞こえてきた。

「なぜだ。どこから漏れたんだ」

ウィリーが焦った声を上げる。そしてヤブの横に立ってる男を見て歯軋りをはじめた。

「サムスンか。あいつが裏切ったのか」

ウィリーの声が聞こえたんだろうか。多分サムスンと思しき男が答えた。

「裏切り者はおまえたちだろうが。女の味方をしやがって」

予想外の急な展開に僕らは動けなかった。強者サンダンスも数多くの弓に狙われている状況では手も足も出ない。

下手に動けば蜂の巣にされるだけだ。

「あいつらは裏切り者だ。女の味方をするつもりなのだ。悪魔の女達の味方は正義の敵だ」

ヤブが演説し始めた。

「どういうつもりだ。でもすぐに答えに気づいた。ヤブは僕らを今すぐ抹殺するつもりなのだ。捕まえる気なんか無いんだ。このまま弓矢で皆殺しにするつもりなのだ。」

「我々は長い間女達に殺され、苦しめられてきた。我々には復讐する権利がある。正義があるのは我々だ。女達を皆殺しにしろ。女達を切り裂き、食い殺せ」

月明かりの下で狂信的な目の色をしたヤブは叫んでいた。

その声に周囲の兵士たちの興奮も高まっていった。

僕らは今まで彼ら兵士達のために、病気を治したり、訓練したり、食料の取り方を教えたりしてきた。彼らも僕らには恩義を感じているし、個人的に親しい間柄の兵士もいるのだ。

ヤブはそれがわかっていているから、その気持ちを断ち切るために声高に自分の正当性を叫ぶ必要があったのだ。

正義の名のもとには恩をあだで返すことも仕方の無い事だと懸命に叫びつつける。

先に動いたのはウィリー達だった。

彼らは捕まったら殺されることがわかっているから、はなから降伏する気なんかない。剣を抜くと、怒声を上げながらヤブの方に一気に走り出した。

すぐに弓から勢いよく放たれた矢が彼らを襲った。

深々と胸に矢を受けて、ものも言わずウィリーは転がった。他の男達も地面でのた打ち回る。

「今だ。逃げるぞ」

サンダンスはヤブのいる方向とは反対側に向かって低い体勢で走り出した。

マサイチが手を引っ張られて転びそうになりながら続く。

僕もガスガンで手当たり次第に敵を打ち倒しながらセンリの手を引いてそれに従った。放たれた矢が僕の顔の横で嫌な音を立てて飛びすぎた。

まだ夜が明けきっていないのが幸いだった。薄暗い中、敵味方紛れ込んでしまうと、同士討ちを恐れて弓矢が使えなくなる。

サンダンスが見事な剣さばきでさえぎる敵を叩き切った。

血煙が舞い、しぶきが顔にかかった。

僕の方に倒れかかってきたその兵士は、顔を見ると先日訓練中に手を貸してやった少年兵だった。

切りかかってくる敵を僕はガスガンで、サンダンスは剣でねじ伏せ、進んだ。

もう少しでジャングルの中に入れる。この斜面を登りきればジャングルだ、という時、マサイチが木の根につまづいて転んだ。斜面を滑り落ちる。

「早く行って」

あきらめたマサイチは見下ろす僕らに叫んだ。

サンダンスは躊躇することなく斜面を駆け下りた。矢が飛んできてサンダンスの足元に刺さる。

次の矢がサンダンスの肩に食い込んだ。

「早く……」

じれったい。早くするんだ。焦りながらも、近づく敵を僕はガスガンでねらい、倒していく。

左肩に刺さった矢を、サンダンスは右手で引き抜く。

マサイチをかばうようにしてサンダンスは斜面を登る。

敵が近づいてくる。ガスガンで倒しても倒しても少しも数は減らない。

矢の勢いもだんだん増してきて、僕も援護するのが難しくなってきた。ジャングルのふちまであとずさる。

「ああ、サンダンスが」

僕の横でセンリが声を上げた。

サンダンスの背中に矢が突き刺さった。ぐうつと声が漏れる。

「行きなさい。早く逃げて……」

前かがみに倒れるサンダンスの背中にさらに矢が突き刺さる。

「サンダンスしっかりして、もう少しだよ」

マサイチは懸命にサンダンスを引き起こそうとするが、重い体を引き上げるのは無理だった。

助けに行かないと……。

ほんの十メートルが降りれなかった。矢はひっきりなしに飛んできていたし、敵はすぐそこまで近づいている。

「早く行きなさい。あたしはもう無理だ。タケル、マサイチをお願い」

そう言うサンダンスに押されてマサイチがふらふらと上ってきた。僕は懸命に手を差し伸べてマサイチを引っ張り上げようとしたが、マサイチはいったん握った僕の手をふいに放した。彼は再び斜面を駆け下りる。

「だめだ。サンダンスが一緒じゃないといやだ」
マサイチがサンダンスに抱きついた。

その瞬間、忍びよってきた兵士がマサイチの背中越しに二人を槍で突き刺した。

二人の血が飛び散り、流れて混ざり合う。

「馬鹿な子。行けば……いいのに……」

「サンダンスと離れるのは……いやだ……」

最後にそんなつぶやきが風に乗って聞こえてきた。

13

涙で周囲がゆがんでいた。

サンダンスとマサイチを死なせてしまったのだ。

僕のやってきたことはいったいなんだったんだろう。二人とも僕がこの星にたどり着かなかつたらこんな風に殺されることは無かつたはずだ。

男達を助けるつもりが、どんどんこの世界を崩壊に導いてるような気がしてきた。

足の力が抜けて座り込みそうになる僕を、センリは叱りつけながら走らせる。

ガスガンを警戒してか、敵兵達は少し間をおいて追ってくる。ガスガンの目盛りを最大に合わせて、僕は大木を何本も打ち倒した。それが障害になって、少しは時間が稼げるはずだ。

「悲しいけど泣いてる場合じゃないわ。早く船の所まで行かないと……」

足の止まりそうになる僕に、センリが言う。でも、それからどうする？ 女の城にセンリと二人で戻ってどうすればいいんだ。

アリアに警告するのか？

男達がもうすぐ責めてくるから迎え撃てと？

僕は女の味方をしたいわけじゃない。男女が平等に暮らしていたという、過去の時代に戻したかったただけだ。

「霊廟に行くつもりだったんでしょ。すっかりして」

またセンリが言った。

そうだった。

マサイチたちを死なせてしまったショックで忘れていた。

この世界をこんな風にしてしまった原因は、霊廟に行けばはっきりするはずなのだ。僕はセンリを抱きしめて、キスをした。

「ありがとう。そうだったよ。霊廟に行く。そこで何もかもはつきりするはずだ。今でも時々降臨しているというその女神に会いに行く」

大地を踏みしめる足に力をこめて、僕は再び進みだした。

幸いなことにウィリーの言っていた通り、船の周囲には誰もいなかった。大木を倒して敵の進路を妨害するようにして逃げてきたから、船に乗り込んで準備をするのには十分な時間があった。

「じゃあ出発だ。女の城に直行だ」

操縦桿を引いて出力を上げると、球形の船は静かに舞い上がった。僕の後ろでセンリは体をぶつけないように僕の肩をしっかりと握っている。

センリの体温が感じられてなんとなく心強かった。

東の空が明るくなってきた。上空から見ると、地表の闇は次第に解け去り、今までモノクロだった世界に鮮やかな色が蘇りつつある。追手の兵が見えたが、思ったより少人数だった。

ほとんどの男達はすでに女の城に向かいつつあるのだろう。

「大丈夫。まだ城まではいってないよ。男の集落から半日はかかる距離だからね」

センリを安心させると言うよりも、自分に納得させるためにつぶやいた。

時間はまだあるはずだ。戦争を回避させるための時間は。

コンピューターが死んだ船を操縦するのは難しい。燃料が心もとなから、あまり練習もしていなかった。

それでも三十分かからずに何とか女の城の上空にやってきた。

時間はあると思っていたのに、ここではすでに戦闘が始まっていた。城門は爆破され、男達が火矢を放ちながら城の中に押し寄せつつあった。

ヤブは別働隊を昨夜のうちに出発させていたんだ。

城門の前で、女の兵士と男達が戦っている。

サンダンスの訓練の成果か、男たちのほうが優勢だ。女達は後ろの建物が炎を上げると共に兵を引き、下がっていく。

アリアの指揮する女兵たちが脇の方からやってきて男達に弓矢を浴びせ掛けた。

男達が何人かその矢で倒れる。

巻き返しが成功したかに見えたが、反対側の城門が爆破され、そこからなだれ込む男達を見てアリアは建物の中に退却していった。

僕はその建物の屋上に船を着陸させる。

屋上には数人の女兵が立っていた。

僕らの船を見上げて、口をあぐりさせている。

船から降りた僕らにかかってくるのかと心配したが、僕らの姿を見ると、彼女らはひざまずいた。

神様、神様と口々につぶやいてる。

「この船はまさに神話に出てくる神の船だったのよ」

センリがつぶやいた。

「霊廟はどっち？」

「こっちよ」

ガスガンを片手に、センリの指示する方に走った。

僕らを阻むものは誰もいなかった。

女兵達は皆男の迎撃で忙しいのだ。

兵隊じゃない女達は建物の消火活動でてんやわんやだった。

煙が立ち込め、息が苦しくなる。

炎の燃える音が、四方八方から聞こえていた。

小さな子供を抱えて母親が逃げ惑う。逃げる住民には使用人として

ここで使われている男達も何人か見えた。彼らは女達に命令されるまま荷物を担いで従っていた。

狭い廊下を抜けると、広いホールに出た。

「あそこのドアを抜けたらすぐよ」

千里の指差す方向には、鈍い金色に塗られた荘厳な扉がある。駆け寄って大きく開く。

そしてその通路を進むと、再び天井の高いホールに出た。

そのホールの中央には、さっきまで僕とセンリが乗っていた船と寸分違わない救命艇が鎮座していた。

救命艇のナンバーはKT109だった。

やはりそうだ。KT109はメアリーの船だった。

彼女は行方不明になってここにたどり着いていたのだ。そしてその後を追って僕がたどり着いたってわけだ。おそらくは数百年の時を隔てて。

14

「やっと到着したわね」

船の陰から女が現れた。

アリアだった。

片手に持った剣からは真っ赤な血が滴り落ちている。

「センリ。あなたはこうなることを望んでいたの？ 女の支配する世界が男の支配に変わるのを？」

アリアはゆっくり近づいてきた。

「私は男女平等の世界を取り戻したかったです。タケルも同じよ。男達をずっと押さえていたけど、反乱が起こって……」

「馬鹿なやつらね。男は戦争をする動物なのよ。男に知能を与えたら、世界は滅びる。メアリーはそう説いていたでしょ。男は金玉だけあればいい生き物だって。私達を妊娠させることだけしてればいいのだった。女が男を支配し、操縦する世界だけが平和を手に入れること

ができるのだったね」

「やっぱりメアリーか。神の降臨というのはメアリーがここに着陸したことだったんだな。メアリーのことは君も知っていたんだろ？」

傍らのセンリに僕は聞いた。

「メ、メアリーと言う名前は私達神官は口に出してはいけない言葉だと言われていたの。あなたは何を知ってるの？」

センリは僕から目をそらして言った。

「メアリーは僕の同僚だった。行方不明になったメアリーを探しているうちに、僕はこの星にたどり着いてしまったんだ。時間は大幅にずれてしまったけど、時空をスリップする時には十分ありえることなんだよ」

アリアにも聞こえるようにそう言ってやった。

君達が神とあがめるメアリーと僕は同類なんだと。

アリアとセンリがその言葉に恐れおののくとは思わなかったが、それにしてもアリアの態度は不自然だった。

まったく動じる様子も無い。そんなことわかってたでも言いたげな不適な笑みを浮かべていた。この城が陥落しようとしている時に、なぜなんだ？

「ふふ……メアリーがあなたに話があるそうよ。船の中で待ってるわ」

アリアがそう言って船をあとで指した。

そんな馬鹿な。彼女が生きてるはずが無い。それとも、数百年のずれと言うのは最初から無かったのか？ 騙されていたのだろうか。

混乱した頭で、僕はその船に乗り込んだ。

もちろん中は空っぽだ。

操縦席に座ると、モニターやら周りのランプがともし、船が蘇るの

がわかった。この船はまだコンピューターが生きていた。
僕よりもメアリーは操縦がうまかったのか。

モニターが明るくなった。そしてその中にメアリーは居た。

記録された映像ではなかった。ちゃんとした人格が、船のコンピューターにコピーされていたのだ。この方法があるということは、僕も思いついておかしくなかったが、何かとバタバタなこの数ヶ月だったのだ。冷静に頭が働かなかったとしても、まあ仕方ないところだろう。モニターの中のメアリーは微笑んでいた。

勝利を意味する笑みに見えた。

僕が勝ったとは思えないが、少なくともメアリーの計画は今にも破綻しかけているのに。それなのに、いや、それを知らずに、微笑む彼女は美しかった。

「多分タケルが来る事になると思っていたわ」

それがコピーされたメアリーの最初の言葉だった。

「ずいぶん落ち着いてるね。君の女の城は焼け落ちる寸前なんだぞ」

「わかってるわ。いったんはこの計画を白紙に戻すことになるよ、気づいていたら」

「なに気づいたんだって？」

恐る恐る僕は聞いた。僕の疑問がすべてここに集結している。

メアリーのこの船は、コンピューターが生きてるのだから。

メアリーは不時着した時点ですべて悟っていたはずなのだ。

「ここが地球だということよ。それは貴方もうすうす感じていたんじゃないの。夜空を見上げれば、一目瞭然だから……」

カシオペアに白鳥座、先日見た星々が思い浮かんできた。

モニターの横の座標に目を移す。ここが地球だというのが確定だと

思い知らされた。

「そんなところだと思っていたよ。でも、高層建築が見当たらない。最終戦争でも起こった後なのか」

未来じゃない、ここは過去の世界だと思っていたが、わざとそんな風に言ってみた。

「ここがはるかに未来の地球だったら、私は貴方を見つけたときにすぐにも殺させていたわ。貴方もわかっていると思うけど、ここは過去の世界。私達の文明が生まれる何千年も過去の時代よ。実はこの船のコンピューターもしばらくは機能を停止していたのよ。バッテリー切れでね。あたしがこの計画を実行して、軌道に乗りはじめていたときにやっと太陽光充電が完了して、コンピューターを動かさせたの。始めから過去の地球だとわかっていれば、こんな荒療治をすることもなかった」

メアリーは何が言いたいのだろうか。

過去にたどり着いたからこそ、地球の歴史を女の支配で変えてやろうと考えたんじゃないのか？ 男たちの支配の歴史を変えるために……。

「貴方が知らないのは当然だけど、私達が居た時代は女の支配が確立した時代だったのよ。男には知らされていなかったけどね」

「何のことだ？」

「脳内新脳よ。あれはもともと男を女が支配するために開発されたものなの。あるキーワードを入力すれば、その時から男はその女に逆らえなくなるように出来るの」

「そんな馬鹿な。気でも狂ったのか」

いくらなんでもそんな陰謀がすべての男たちに秘密のうちに進められるわけがない。秘密は必ず漏れ出してすぐにスキャンダルに発展す

るはずだ。

「気の狂ったコンピューター上のデータとおしゃべりするのはもう止めましょう。君に聞かなくても、このコンピューターでいくらでも調べられる。長い間死ぬことも出来ずにここに縛られていた君に、同情的気持ちと共にさよならを言うよ」

モニター上のメアリーの顔に僕は軽くウインクをすると、メアリーのデータを消去する準備に入った。

まずコンピューター制御の部分を切り離し、船の制御をすべて手動にする。

あとは、彼女に僕を邪魔する手段は何もなくなる。

彼女のデータの部分をフォーマットしておいてやるだけだ。

とにかく、無駄なことに時間はかけられない。

ここを早いとこ済ませて、男たちの軍隊を静めないといけないのだ。

「この城が焼けて、この女達が皆殺しにされたとしても、まだこの星が滅亡するわけじゃないわ。たくさんある女の城の中のたった一つなんだから」

あせりながら作業をする僕を、モニターの中からメアリーは見つめている。確かにそれはそつだ。

この周辺の人間がこの星の住民すべてではないのだ。

では、他の地域には男の支配する社会や平等な国があるのだろうか。いや、メアリーは、ここはたくさんある女の城の中のひとつという言い方をした。

男の知能を破壊するウイルスは全世界に広まってしまってるんだろつ。

「さて、長い間ご苦労様でした。君を消去する準備が出来たよ。最後

に別れの言葉くらいは聞いてやるよ。昔馴染みだしね」

いつのまにか僕の横にセンチとアリアが来ていた。

二人は僕とメアリーのやり取りを真剣な表情で見守っていた。

メアリーの消去をアリアに邪魔されないか心配でガスガンをそれとなく構えていたが、アリアには手出しをする気配もない。

三人が見守る中で、メアリーは最後の言葉を口にした。

「脳内新脳のパスワードを教えてあげる。貴方を愛してるわ、貴方も私を愛してね」

メアリーの声を聞いた瞬間、僕の中で別の人格が起き上がる気配がした。メアリーに対する愛情が湧きあがってくる。

逆らい様のない感情の渦に僕は巻き込まれた。

メアリーに従う事が僕にとって最高の幸福感を伴うものになったのだ。

メアリーの奴隷になる事が僕の幸せなのだ。

彼女の言った事は正しかった。

すでに計画は完遂していたのだ。

僕たちの時代はメアリーの計画の上に成り立ったものだったのだ。

「わかったでしょ。ここは過去の世界なのよ。ここで決定されたことは未来を変えるのよ」

メアリーの声が優しく僕に言った。

「そつだ。そして未来を変える十分な力がここにはある」

僕の声が別人の言葉のように聞こえた。

人格をのつとられたような気がするが、不思議と喜びの感情が溢れ出してくる。嬉しくてたまらない。

センチが心配そうに見上げている。

アリアはほっとした表情をしている。

これから僕のすべきことがモニター上のデジタルの信号を使って脳内に入力されてきた。途方もない計画だった。

いったんは本来の地球の歴史に戻す。そのあと、科学の世紀が始まったときに再びこのプロジェクトは胎動をはじめ、脳内新脳計画を実行に移すことになるのだ。

確かに普通に考えれば脳内新脳で男を支配する計画など実現できるはずがない。

しかし、こつちには過去を握っているという利点とこのコンピューターがあるのだ。これなら実現できる。

その証明はすでに僕の頭の中に存在するのだから。

女の支配する世界といってもこの世界みたいに極端な世界にはならない。

そのことで僕は少しだけ安心した。

男は金玉だけあればいいのよ。そんな昔のメアリーの言葉が浮かんだが、あの時彼女は知らなかったのだ。すでに男は女の支配下だったということ。

でも、今から先、新しく始まる時代に生まれてきたメアリーは悟るだろう。

男は金玉だけじゃなくて、身体も有ったほづが奴隷としての使い道があるということ。

その時代まで、長い年月を僕は生きなければならない。

人間としての寿命が尽きたときは、メアリーがしたようにコンピューターの中の人格として、メアリーと合体し、部下に命令を下す。

約三千年の年月を、きちんと組まれたプロジェクトどおりに進めるのは簡単じゃないだろうが、最初から完了することは決定しているのだ。

横でセンリが僕を見つめている。

「すべて終わったよ。そしてすべてはここから始まるんだ」

僕はそう言っただけでセンリの唇に、自分の唇を合わせた。

センリに対する愛情が変化していかないのが嬉しかった。

彼女を幸せにする事くらいは出来るだろう。

少なくともそれで計画が破綻することはないはずだから。

女の惑星 おわり